

2002 年度春学期大岩研究会 1 タームペーパー

『熟年者向け情報教育 「御所見パソコン教室」からの考察』

総合政策学部 3 年

学籍番号 70004441

ログイン番号 s00444ks

氏名 佐藤聖

1 研究動機・概要

私は先学期大岩研究会1の活動内で、御所見パソコン講習会のカリキュラム作成、運営に参加した。御所見パソコン講習会は藤沢市が主催、御所見公民館が開催するパソコン講座で、応募・抽選によって選ばれた性別年齢不問の30名の人々に、基礎的なパソコンスキルを学んでもらう講座である。大岩研究室では先学期からこの講座の実質的な担当者として市から依頼を受け、今年の2月、6月の2回の講習を運営した。

その中で私はカリキュラムの作成を主とする事前準備全般に携わり、同時にインストラクターとして講習に参加するという貴重な経験をする事が出来た。そこでその経験を整理し、今後の情報教育のあり方の問題点を提示する事によって、今学期の研究会での活動報告としようと思う。そうした活動報告がどのような意味を持つかと言えば、私自身の今後の活動への方針を導く事もさる事ながら、同様の作業をする後進の人々に対しての一つの指針となり得ると考える。

2 カリキュラムの概要と成否（カリキュラム作成者としての視点から）

御所見パソコン講習会そのものの概要、実施体制は研究室内に資料をファイリングしてあるので、説明を省略する。ここでは、そのカリキュラムがどのような目的で作成されたかの概要を説明する。なお、2回の講習会のカリキュラム内容は違うモノとなっているため、別個に説明した。

1 初回のカリキュラム

初回時の教育目的は、図1（当レポート末尾に添付）のようなコンピュータ初級技能習得のモデルを考え、

パソコン習得に絶対必要なマウス操作と日本語入力を楽しく学ぶ

という3本柱からなる基本コンセプトを打ち出した。それに伴い楽しくマウス操作を学ぶために、ウィンドウズに標準インストールされている「ソリティア」というランブゲームによる遊びながらの練習を採用した。また、キーボードによる日本語入力を学ぶ事は短時間では難しく、かえって逆効果（PC嫌い、中途半端な技術による悪癖の習慣）を生むと考え、「日本語入力をマウスで行えるSKEYというフリーソフト」を導入、日本語入力の教材としては、実際の講習会では熟年者が多数を占める事を念頭に「名刺作成」「年賀状作成」を名刺作成は専用フリーソフト、年賀状作成はウィンドウズ上での一般的な文章編集アプリケーションとしてWORDを利用して、作成するものとした。

2 初回の講習会での反省

初回の講習会では、上記のカリキュラムに乗っ取って講習が実施されたのだが、結果は事後アンケートの回答（研究室内にファイリング）に現れたように、概ね公表であった。上述のコンセプトで言えば「楽しく」学ぶ事は出来たようである。これは成功と言って良いだろう。「ソリティア」「名刺作成」「年賀状作成」は多少のばらつきはあるものの、総じて受講者（20代～80代）に幅広く支持された。また、日本語入力方法（変換、改行、空白等）についても、インストラクターの視点から見て大体の人が理解をしていたように思われる。

しかし、実験的に導入したSKEYによる、キーボードを使わないマウスのみでの日本語入力に関しては、受講者内で大きくその評価が分かれる事になった。アンケートからは以下の点が読み取れる。

- *実務経験を多少経験した事があるような人の目で見ると、SKEYは実用的ではないという認識...文字入力のスピードの遅さ、EXCEL等の表計算ソフトとの相性の悪さ*
- *受講者の年齢が上がるに連れて、SKEYは使いづらいという意見 若い人にはSKEYは概ね好評*
- *全くキーボードを触った事が無いので、不安であるという一般認識から来る不満*

これらの点から、受講者の中に早く文字入力を行いたいという願望が強い事と、高齢者にとってはマウス操作そのものが難解で、一概にキーボードより楽とは言えない現実が浮かび上がったと考えられる。SKEYそのものの表示スペースが、文字入力のスペースを隠してしまう、等の避けられない不満も当然多かった。

またコンセプトに直接盛り込まなかった、Windowsの基本操作（スタートメニューの使い方、ウィンドウの操作等、アプリケーションの概念）のタスク分析が甘かった為、受講者のスムーズなSKEYの操作を妨げたという、副次的要因も挙げられるだろう。

3 第2回のカリキュラム

初回時の反省から、第2回のカリキュラムでは幾らか試験的ではあるものの、キーボードを使用する事を決定した。ただし、単にキーボードを使うだけでは当初挙げたような悪癖がつく問題や、失敗経験によるPC嫌いになる可能性があるため、その後にパソコンで作業する際の重要なスキルとしてのタッチタイピングに繋がるように、きちんと体系的な正しい教え方を取る。今回は該当部分は大岩先生が直接インストラクターとして執り行う事になった。ここで問題となるのは時間であり、本格的にタッチタイピング

を出来るようになるためには、到底2日間では足りない。加えて他にもやらなければいけない事がある。そこで今回はタッチタイピングの基本的な練習方法だけを示し、大岩研究室作成のタイピング独学用ソフト「タイピング体操」を配布して、講習後も継続してタッチタイピングの練習が出来るよう配慮した。当然「タイピング体操」の起動方法のマニュアル等是不備がないように真剣に作成した。

またそれに伴い初回時の「名刺作成」カリキュラムをやめ、「年賀状作成」は時期にあわせて「暑中見舞い作成」に変更した。さらに要所要所で Windows の基本操作をきちんと体系立てて練習できるようなカリキュラムへの見直しを行った。

4 第2回の講習会での反省

第2回の講習でもアンケートの結果、受講者の反応等見ると満足度は高かったようで、やはり「楽しく」学ぶという基本コンセプトは達成できているようであった。カリキュラム上の反省点とは言えば、やはり熟年者向けに短時間でキーボードを扱う事の是非について、賛否が分かれた事に集約される。短時間でキーボード入力のコツを理解するのは難しく、やや中途半端になってしまった部分もあり、受講者の一部はキーボードに恐れを抱いてしまったようである。その反動か、マウス操作とSKEYの組み合わせのほうが良い、という意見も初回時に比べて多く出た。とは言えキーボードの方が良いという人も2割程はおり、それはあまり年齢には拠らないようであったので、この点は教え方とカリキュラムの作り方次第である程度カバー出来ると考えられる。今回キーボード練習にかけられる時間は、私自身のカリキュラム進行の遅れにより、かなり短くなってしまった。その点は反省したい。受講者の側にももっとキーボード練習の時間をたっぷり取って欲しかった、という要望が非情に多かった。なかなか結果に結びつきにくい技術であるだけに、受講者の満足度を考えると、時間が足りないのは悔やまれる部分であった。

要所要所で盛り込んだ Windows の基本操作練習は、こちらの思惑通り大分進行を楽しめた。受講者にとってもそれによって遊び心が生まれ（暑中見舞い作成作業を最小化で隠して、ソリティアをやる人がいた）、自分からパソコンを積極的に使う姿勢が出来てきたように思われる。次に繋げるのであれば、この部分はより一層洗練していく必要性が感じられた。

3 講義進行の概要と成否（インストラクターの視点から）

カリキュラム作成者としてではなく、インストラクターの視点から2回の講習会を分析する。

1 インストラクター

インストラクターは2回とも私が行ったのだが、その際に特に注意した事を列記し、その事に対する評価を行う。

- タスク分析によって操作・概念の基本となるポイントを見つけ出しておく
 - マウス操作...マウスの持ち方、手の力を抜く事
 - 日本語入力...文字カーソルの認識、変換の3段階（ひらがな入力、変換、確定）
 - キーボード操作...きちんと腕ごと動かす事、手元を見ない、打つ文字を意識する事
- 発見されたポイントは、講義中何度でもそこに立ち戻り、理解してもらう
- PCは彼らにとって身近な概念ではないので、出来るだけわかりやすいメタファーを用いて直感的に概念を理解してもらう
 - マウス...リモコン=機械に意思を伝えるもの
 - 文字入力...「頭」で考えてから「紙」に「場所」を決めて「書き出す」という事の再現である
- 受講者には一度に多すぎる情報を与えない。少しずつ、細かく与える
- 講師用画面から受講者用画面に戻す際に、必ずこれからやる事を画面上で再度示す
- TAに負担のかからないように、過不足無く必要な情報を与える
- ただし、進度の早い人のフォローはインストラクターは基本的にはしない
- 用語は統一し、同じ意味の事を複数の言葉で表現しない

これらは基本的に受講者にとっていかにわかりやすく講義が出来るかという点と、進度の遅い人に合わせて進めていくという信念から出てきている。よって、その観点から評価すると、全体としてそれ程遅れた人もおらず、極端に理解が間に合わない人もいなかったという点で、一定の成果は上げられたのではないだろうか。

しかし、逆に言えば進度の早い人をどうするか、全体の進行のスピードは適正かという面で課題は残る。進度の早い人に関しては、TAにまかせてしまった部分が多いが、これに関しては後述するが、少し失敗だった部分もある。また、2回目の講習会ではカリキュラム自体も問題があるが、予定より大分遅れてしまい、後の講義に支障をきたしてしまった。もう少しインストラクターとしてスムーズに講義を進められなかったかと

いう点で、幾つかの反省を挙げておく。一番の大きな問題としては、つまづきをあらかじめ予測しておく作業を、怠ってしまった事がある。そのためトラブルが起こった際に、柔軟な対応が出来なかった。また、これはカリキュラムの問題でもあるが、時間に余裕が無い時の調整場所を、少し曖昧にしすぎていたことも挙げられる。遅れた場合の代替プランも考えておく必要があるだろう。これらは講義の安定度を増すために必要であったと考えられる。

2 TA

TAは非常に能動的に動き多くの成果を挙げたが、それでもインストラクターの観点から見て、幾つか反省すべき点はあるように思われる。

これは主にインストラクター側の責任になるのだが、打ち合わせが不足のために、TAは基本的にはインストラクターの態度を見て、TAとしての態度を決めていたように思われる。そうした時にインストラクターと同様、進度の早い人に対する指針が示せていなかった。2回目の講習では多くの人がTAを未体験であった為に、より一層の事前打ち合わせが必要であったのだが、その点は明らかに準備不足であった。次に繋げていくのならば、インストラクターとTAの打ち合わせは、きっちりと詰めておく必要があるだろう。

また、どちらかと言えば「質問に対して答える」というスタイルに縛られすぎているようにも感じられた。基本的に上達の早い人であっても初心者である事は変わりが無いので、放って置かれると物足りなさや、不安を感じていた人が多かったようである。しかしそうした人は特に困ってはいないので、質問をしない人もいる。そうした人へは積極的にTAの方から話し掛けて行くべきであった。アンケートを見ると、一番進度の早かった人の満足度が一番低かった。この事からもわかるように、少し進度の遅い人だけにエネルギーが集中しすぎたかもしれない。その点はインストラクターとTAの連携を強化し、TAには進度の早い人にもっと関るべきであった。

4 プロジェクト進行の成否（プロジェクト管理者の視点から）

プロジェクト進行に携わる諸業務（交渉、現場の管理、機材の準備、人的管理等）に対しても、反省すべき点は多かった。この点に関しては、多くをCREWの先輩である岡田さんや川村さんに頼ってしまったが、それでも私がカリキュラムを管理する責任上、どうしても直面せざるを得ない問題があった。主としてTAとの関係作りと、現場の環境管理である。

TAとの関係作りは、主にお互いの講義に対する価値観を共有する事から始まる。そのためには例え数時間でも共同で作業をする事が求められるが、今回のプロジェクトの場合は私自身が当初それ程TAと親しくなかった事もあり、予定の調節が上手くいかなかった。この事はインストラクターの立場からも、TAの立場からもマイナスであった。何よりTAの側にプロジェクトに参加していると言う満足感を与えられなかったのは、本当に悔やまれる。少し無理をしてでも共同で作業をするべきであったと思う。

またその観点から、カリキュラム・教材等をより一般的な形式に書き直し、プロジェクトに参加していない人でも、見ればわかるような資料を作る事の重要性を思い知った。この事は以前から先輩等に言われていたのだが、2回目になって、限られた時間の中で作業をしなくてはいけない時に、非常に重要なのだという事を実感した。その点についての反省から、今回の作成資料は後から見てわかりやすいようなものを心掛けた。

現場の環境管理に関しては、当日になってから各マシンの環境が異なる点に大分苦しめられた。これも事前の下見等で分かっていた事なのだが、実際のそれは予想を越えていて、講義の進行の妨げとなるマシントラブルも、幾たびか発生してしまっている。こうしたマシントラブルは、初心者にとっては致命的な失敗経験となりうるので、この先も細心の注意を持って取り除いていくべき要因である。

5 将来の展望

御所見パソコン講習会が我々にとって特徴的なのは、対象者が広い年齢層にまたがり、かつメインとなるのが4, 5, 60代の熟年層である事である。カリキュラム、インストラクター、TA、全てがその事に敏感である必要があった。

しかし、実際に2回の講習を通して感じた事は熟年層の場合でも身体的な運動レベルをクリアできれば、時間はかかるものの、情報技術の習得は可能であるという事である。逆に言えば今回のような講習では時間が足りない事も事実ではある。受講者の声を聞くと、「継続的に行って欲しい」「次のレベルのコースが受りたい」という意見が非常に多かった。意欲は人一倍ありそうである。

そこで重要になるのは、彼らが持続的にPCと関り続ける環境作りであるように思われる。今回の講習でも「家に帰ったら忘れてしまいそう」という意見が多く聞かれた。研究

会の菅沼さんがその点で、「ネットワークを介したコミュニケーション」を軸に据えると、彼らが積極的に情報と関っていけると経験的に話してくれた。であるならば、今後熟年者達が、限られた範囲ではあるものの情報環境に馴染んでいく可能性は広がるだろう。そうした点からも御所見パソコン講習会では、環境の関係からネットワークを使用できなかったが、今後はネットワークを使った（あるいは使えるようにする）教育を考えていかなければならないだろう。

そこではいわゆるネットワークの受動的な使い方ではなく、能動的な使い方、つまり情報発信や、情報収集が出来るような教育が行われる事が望ましい。御所見パソコン講習会では年賀状や暑中見舞い等を作成したが、これも何らかのソフト等は使うとしても、簡単なホームページを作るような方向を目指した方がより「楽しく」学べるのかもしれない。当然そこに至るまでには多くの時間が必要ではあるが、である。

6 今後の研究の指針

一応2期連続で熟年者向け情報教育の事例として、「御所見パソコン講習会」に携わる事が出来た。その事は自分にとって非常にプラスになったと思う。インストラクターとしての経験は単にそこでだけではなく、他の場所での自信にも繋がったようにさえ思う。ネットワーク環境が整っていない事などもあり、制限が多かったのだが、逆に不必要に拡大しないで、大切な事が何であるのかを見極められた気がする。ここで得た事を忘れずに、もしネットワーク環境のあるところで行うならば、どんな教育が適当か改めて考えてみようと思う。

また、対象を熟年者向けだけに限ると例えばプログラムであるとかそういった部分は除外されてしまいがちなので、そうした部分も今後は考えていきたいと思う。あまり何をやるかに捕らわれず、今どのような教育が必要とされているのか、を基準に今後も情報教育に関していこうと考えている。